

東京都江戸川区

1 研究テーマ及び研究の観点

研究テーマ：家庭及び地域における幼児期の教育の支援の在り方を探る

ー親子ひろば「あい・あい」事業を通してー

研究の目的：①幼稚園，地域，行政が連携して行う子育て支援の在り方を探る

②子どもの発達や保護者のニーズに即した子育て支援の在り方を探る

2 地域の概要

公立幼稚園 5園(2年保育) 私立幼稚園 41園(休園2)

公立保育園 50園 私立保育園 31園

江戸川区は、20～30代後半の子育て世代が多い。核家族や親の低年齢化傾向にある。3～5歳児は87～94%が幼稚園か保育所で集団での保育を受けている。0～2歳児は28～34%で、家庭にいる0～2歳児が多い。

こうした状況の中、幼稚園が主体になり、積極的に地域の力を取り入れ、行政とも連携を図りながら子育てを中心とした人のつながりをつくり、互いに育ちあう子育ての場づくりをしていくことが課題である。

3 研究協力園

江戸川区立鹿本幼稚園 江戸川区立船堀幼稚園

4 研究の内容及び方法

研究の方法：・親子ひろば「あい・あい」の実践と分析・考察

・アンケート調査の分析・考察

研究の内容：

(1) 親子ひろば「あい・あい」の実践

① 親子ひろば「あい・あい」の概要

区立幼稚園を広く地域のコミュニティの場として提供し、幼稚園が中心になって地域とともに行く子育て支援事業である。

午前の広場 対象：0～3歳児と保護者

内容：未就園児の親子登園 子育て相談

登録料 500円～1,000円(年間)

午後の広場 対象：0～5歳児と保護者

内容：園庭開放，親子スクール，子育て相談

登録料 なし

*在園児のみショート・サポート保育(預かり保育) 1日500円

土曜の広場 対象：0～5歳児と保護者

内容：園庭開放，親子スクール，子育て相談

材料・教材費徴収

スタッフ 指導員(2名～3名 幼稚園教員免許保有) 応援団スタッフ

(2) 子どもの発達や保護者のニーズや園の実情に即した子育て広場

午前の未就園児の親子登園は、年齢ごとに曜日を決めて行う。場所は、余裕保育室や遊戯室を使用する。しかし、教育課程内の教育活動に支障がないよう、場や時間、回数に配慮する。余裕教室に対して登録希望者が多い場合は、週に2～3回同じ広場を行い、年間で曜日を選んで参加できるようにするなどの工夫をする。

① 午前の広場(担当：指導員1名 応援団スタッフ)

ア. 0～1歳児の広場(週1～2回)



・保護者と子どものスキンシップが十分できるよう、また、保護者同士がゆったりと話せるような場の設定や遊びの内容に配慮

する。

・舐めたり、投げたりしてもよい遊具の準備に配慮する。

・心地よい音や動きが楽しめる遊具を用意する。

イ. 2歳児の広場(週1～2回)



・体全体を動かし、安全に走ったり、動いたりできる広い場所で行う。

・保護者を安心の基地にして、自分の欲求や興味のある

遊具や場所で十分遊べるように場や時間に配慮する。

・同年齢の子ども同士が触れ合える場や遊具を準備する。

・身近にある物や身体を使った遊びなど、家庭でも親子で遊べる遊びを提示していく。

ウ. 3歳児の広場（週2回）



- ・ 同年齢の友達との触れ合いを楽しめる場や内容の工夫をする。
- ・ 指導員への親しみの気持ちもてるようにし、指導員

の指示で遊ぶ楽しさが味わえるようにする。

- ・ 集団生活に必要な基本的な生活行動に慣れるようにする。（自分の場所に所持品を片付ける。手洗い、うがい、おやつなど）
- ・ 指導員や同年齢の友達と表現遊び、リズム遊びやお話を聞くなど集団ならではの活動も楽しめるようにしていく。

② 午後の広場（毎日 担当：指導員1～2名 応援団スタッフ）



- ・ 保護者も子どももゆったりと過ごせるよう、また、教育課程内の生活との関連も考慮し、内容や開放時間に配慮する。

- ・ 場や遊具を使う時のルールなど明確に伝え、安全に過ごせるようにするとともに、翌日の保育に支障がでないようにする。
- ・ 指導員を中心に昔遊びや体操など親子で遊べる遊びなども提示していく。

③ 土曜日の広場（指導員1～3名 応援団スタッフ 教員）



- ・ 親子で遊ぶ楽しさを十分味わえるようにする。
- ・ 園庭開放では、竹馬や幼児の自転車、一輪車の練習の場として場を提供し

ていく。

- ・ 親子スクールでは、普段、幼稚園や家庭ではできないような科学遊び、自然体験、昔遊びなどの体験の機会となるようにする。
- ・ 身近な自然や地域の環境や人と触れ合える機会となるようにする。

(3) 幼稚園の教育力を生かした子育て広場

- ・ 幼児期にふさわしい幼稚園の環境を十分活用した広



場にする。

- ・ 園長を始めとする幼児教育の専門家である幼稚園の職員は積極的に子どもや保護者とかかわるようにする。

- ・ 園児が遊ぶ姿や教師の姿を見たり、触れ合って一緒に遊んだりできるようにして、幼稚園教育を具体的に理解できる場とする。
- ・ 幼稚園がこれまでに培ってきた地域や行政機関とのつながりを生かし、広場の充実を図る。

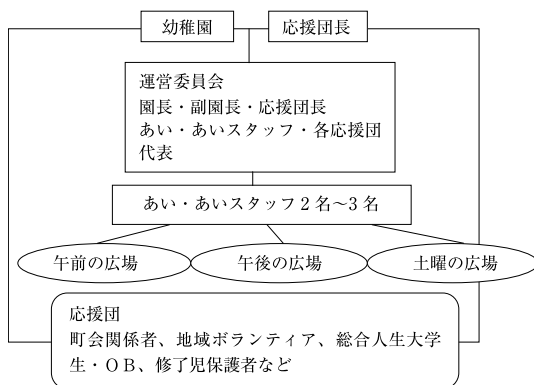
(4) 地域の教育力を生かし、共に行う子育て広場

① 「あい・あい」応援団の組織化

親子ひろば「あい・あい」は幼稚園が中心になり、地域とともに行う子育て広場である。日頃から幼稚園に協力いただいている地域の方や関係機関に、親子ひろば「あい・あい」事業の目的の理解を図り応援団員として登録していただき「あい・あい応援団」として組織的に取り組めるようにした。応援団長は、町会長やPTA 会長などが適任である。広場活動終了後や定期的に反省会や連絡会をもち、各広場の応援団員同士の交流を図り、各広場の充実につながるようにする。このことにより、子育てを中心に、保護者や子どもと地域、応援団員と応援団員のつながりが生まれ、幼稚園が地域のコミュニティの場としての役割を果たすことにもつながっている。

② 応援団の活動

「あい・あい」ひろばの組織



午前の広場 場づくり 受付事務 指導補助 会の企画・運営・進行 お話し会 対象児の弟妹の世話など

親子スクール 自然・科学・昔遊び体験教室の指導・進行 材料提供など

【その他】ポスター・チラシ・掲示板デザイン提供など

③ 関係機関との連携

特別支援学校と連携して、特別支援を要する幼児とその保護者を対象にした親子ひろばを2回開催。また、町会と共催し、地域の川べりのウォークラリーなどを行った。

④ 行政との連携

子育てひろば「あい・あい」は江戸川区教育委員会主管の事業であり園と共にやっている。担当部署の担当者との連絡を密にし、各学期ごとに担当者会議を園長・副園長が行い、園と行政機関の役割や親子ひろば「あい・あい」実情・課題の共通理解を図っている。

行政機関の役割：ひろば登録票作成 各園実施状況集計 選任指導員（非常勤）の採用・配置 区全体への広報（区民ニュース、ポスター作成）

5 研究成果と課題

(1) 研究の成果

① 子どもにとって

年齢に即した発達を促すとともに、多様な体験をすることができた。また、親との愛着関係を深め、地域との出会いや親しみ、感謝の気持ちをはぐくむことができた。

② 保護者にとって

安心して親子で過ごせる場、親としての気付きがあ

り学び合える場、子育ての仲間を見付ける場をもつことができ、子育ての楽しさや喜びを感じる場になった。また、地域とつながる機会になった。

③ 地域にとって

地域の人材や場が活かされ、若い保護者とつながる機会となり、地域の活性化が図られるきっかけになった。また、安心して子育てができる場が地域にでき、健全な地域環境づくりにつながった。

④ 幼稚園にとって

園だけではできない体験や様々な人とのつながりなど、幼稚園の教育力が高まるとともに、地域の人に幼稚園の教育の理解を図る場になった。また、地域と協力し合い助け合える関係ができ、地域の中での存在感が高まった。

以上の成果の要因として、a. 教育委員会主管事業になる b. 組織的に地域力を生かす。 c. 専任の指導員が配置されている d. 幼稚園の教育力を生かす、以上4点が考えられる。

(2) 今後の課題

- ・各広場の内容の充実
- ・幼稚園を中心としたネットワークづくりと応援団組織の拡充及び強化
- ・職員・専任指導員、応援団の専門性の向上

高知県

1 研究テーマ及び研究の観点

《研究テーマ》

家庭及び地域における幼児期の教育の支援の在り方

《研究の目的》

保育の専門職である幼稚園教員や保育士と母子保健の専門職である助産師が連携して子育て支援を実施することにより、幼稚園・保育所等で、質の高い子育て支援が提供できると考える。そこで、幼稚園・保育所等で実施している本県の「子育て・親育て支援事業」が、保護者の育児不安の解消や良好な親子関係の構築を図る支援として有効であるか明らかにする。

2 地域の概要

(1) 地域の概要（平成20年5月1日現在）

地域の範囲 (市区町村名等)	人口	幼稚園		小学校		保育所	
		幼稚園数	幼児数	学校数	児童数	保育所数	幼児数
高知県	千人 785	園	人	校	人	園	人
		(国)	147	(国)	741		
		(公)	1,084	(公)	39,767	(公)	9,968
		(私)	3,377	(私)	231	(私)	9,622
合計	785	58	4,608	296	40,739	276	19,590

《研究テーマに関するこれまでの取組や課題》

乳幼児期は親の影響を強く受けることから、子どもの健やかな育ちのために良好な親子関係を築くことが重要であると考えられる。しかし、家庭や地域における教育力の低下から、子どもとのかかわり方がわからない保護者が多くなっている。そこで、本県では平成19年度から助産師を子育て支援アドバイザーとして委嘱し、幼稚園・保

育所等に派遣する「子育て・親育て支援事業」を実施し、子育てで不安の解消や良好な親子関係を構築するための支援を行っている。

3 研究協力機関

① 幼稚園・保育所 (平成20年5月1日現在)

幼稚園名		3歳児	4歳児	5歳児	合計	教職員数
高須幼稚園	学級数	2	2	2	6	10
	幼児数	45	44	35	124	
枝川幼稚園	学級数	1	1	1	3	10
	幼児数	22	22	22	66	
香我美幼稚園	学級数		2	2	4	10
	幼児数		57	65	122	

(平成20年4月1日現在)

幼稚園名		0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	合計	教職員数
香我美おれんじ保育所	学級数	1	2	2	2	7	26
	幼児数	7	23	29	44	103	

② 幼稚園、小学校、保育所以外の研究協力団体

	団体名等	団体等の研究協力概要
1	子育てセンター「あのねひろば」	子育て全般に関する専門的な支援を行う拠点として機能する。

4 研究の内容及び方法

研究協力園3園2施設(公立幼稚園2園・私立幼稚園1園・公立保育所1園・地域子育て支援センター1箇所)で、保護者(主に母親)を対象に「子育て・親育て支援事業」(子育て支援アドバイザーによる、講話・親子のスキンシップ体験・保護者同士の交流会・保育者との交流会等)を実施し、一週間後に保護者と保育者にアンケート調査を実施し、そのアンケート結果を分析考察する。

(1) 研究結果

【保護者アンケート結果】

施設区分	度数	パーセント
幼稚園	142	79.3
保育所	24	13.4
子育て支援センター	13	7.3

計179

《回答者の属性》

1. 子どもの人数

人数	度数	パーセント
1	34	19.0
2	98	54.7
3	40	22.3
4	7	3.9

計179

2. 同伴の子どもの年齢

年齢	度数	パーセント
1～6ヶ月	8	4.5
7～12ヶ月	3	1.7
1歳	12	6.7
2歳	18	10.1
3歳	20	11.2
4歳	53	29.6
5歳	34	19.0
6歳	28	15.6
未回答	3	1.7

計179

3. 子育て支援者の有無

有無	度数	パーセント
あり	127	70.9
なし	52	29.1

計179

4. 仕事の有無

有無	度数	パーセント
あり	66	36.9
なし	112	62.6
未回答	1	0.6

計179

《子育て・育児についての知識》

5. 子育て・育児についての知識収集源

知識収集源	度数	パーセント
育児教室などへの参加	77	43.0
育児相談(幼稚園・支援センター・かかりつけ医等を含む)	71	39.7
雑誌や本の講読	134	74.9
インターネットでの検索	48	26.8
友人・知人などから	16	8.9
家族(親・姉妹等)から	7	3.9
その他(研修等への参加)	6	3.4

計179

いくつかの知識収集源を利用しているか。

知識収集源の数	度数	パーセント
0	6	3.4
1	65	36.3
2	55	30.7
3	34	19.0
4	15	8.4
5	2	1.1
6	2	1.1

計179

6. 参加される前の子どものかかわり

程度	度数	パーセント
積極的にしていた	44	24.6
していた	101	56.4
あまりしていなかった	28	15.6
していなかった	6	3.4

計179

《変化の状況》

7-1 子どもにかかわる意識の変化について

	大いに思うようになった	思うようになった	やや思うようになった	変わらなかった
1) 見つめ合いが大切と思うようになった	4.5%	5.6%	31.8%	58.1%
2) 肌の触れ合いが大切と思うようになった	3.4%	3.4%	31.8%	61.5%
3) 語りかけが大切と思うようになった	2.2%	4.5%	33.0%	60.3%
4) 関わりが大切と思うようになった	3.9%	3.4%	27.4%	65.4%

(考察) 大きな意識変化はなかったが、約4割の参加者が変化を認めた。

7-2 子どもと実際のかかわりの変化について

	かなり増えた	増えた	やや増えた	変わらなかった
5) 見つめ合う機会が増えた	12.8%	24.0%	41.3%	21.8%
6) 肌が触れ合う機会が増えた	14.5%	25.1%	37.4%	22.9%
7) 語りかける機会が増えた	15.6%	20.7%	39.7%	24.0%

(考察) 子どもへのかかわりは3/4以上の参加者があがる程度増えており、大きな行動の変容があった。

7-3 子どもの変化について

	かなり増えた	増えた	やや増えた	変わらなかった
8) 反応が変わったか	21.3%	29.9%	36.2%	12.6%
9) 表情の豊かさが増えたか	23.6%	26.4%	35.6%	14.4%
10) 声を出すことが増えたか	22.4%	28.7%	32.2%	16.7%

(考察) 子ども自体は8割以上が活動的な変化が生じており大きな影響を与えた。

7-4 子育てに関する気持ちの変化について

	かなり増えた	増えた	やや増えた	変わらなかった
11) 子育ては楽しいと感じることが増えた	19.5%	31.6%	32.2%	16.7%
12) かわいいと感じることが増えた	26.0%	15.6%	37.0%	32.4%
13) 笑う子どもを見て嬉しいと感じることが増えた	14.4%	15.5%	30.5%	39.7%
14) 母さんの心のゆとりが増えた	21.3%	35.1%	30.5%	13.2%

(考察) 多くの参加者が気持ちの変化があったと回答。特に心のゆとりが増えたとの回答は5割を超えていた。やや増えた回答を加えると9割近くなる。

7-5 周囲のひととのかかわりの変化について

	かなり増えた	増えた	やや増えた	変わらなかった
15) お母さん仲間と子育てについて話をする機会	36.8%	31.6%	24.1%	7.5%

(考察) 参加者の9割以上が周囲とのかかわりが増えたと回答し、この点での変容が最も多かった。

7-6 子育ての状態の変化について

	増えた	やや増えた	変わらなかった	やや減った	減った
16) 発達についての不安が減った	0.6%	2.9%	35.3%	40.5%	20.8%
17) 不安・心配が減った	0.6%	1.1%	33.9%	44.8%	19.5%

(考察) 不安がいくらか軽減した参加者は6割以上おり、子育ての不安の軽減にも効果があったと言える。

(2) 変化と属性との関係

- 子どもの人数(兄弟姉妹数)の違いによる変化の差は、統計的に有意なものはないことから、子育て経験の違いに関係なく、「子育て・親育て支援事業」の取り組みは効果があったといえる。
- 仕事の有無による変化の差は、統計的に有意なものはない。
- 子育てについての知識を得る情報源の種類の多さによる変化の差は、統計的に有意なものはない。様々な情報を得ていた者と、少ない情報源の者で変化に違いがないことから、「子育て・親育て支援事業」で提供された知識・技術は他で得られないものといえる。
- 子育て支援者の有無はほとんど全ての項目で、変化に統計的に有意な差がもたらされた。支援者が少ない保護者の方が、意識の変化及び行動・気持ちの変化が大きかったが、不安や心配が軽減されたのは、支援者がある保護者の方であった。

8~9 《自由記述》

- 子どもの発達段階に応じたかかわりやスキンシップ(親子の触れ合い)の大切さがわかった。
- 親は子どもの手本であることや、子育てはやり直しができることを理解した。

【保育者アンケート結果】

1) 助産師が子育て支援に加わることについて

- 妊娠から出産に携わる助産師は、母親と子どもの原点であることから、母親には心強い支援者になる。
- 母子分野の専門職である助産師と、保育の専門職である保育者が一緒に支援することで支援の内容が充実。

2) 助産師が実施した子育て支援で印象に残ったことや参考になったこと

- キッズマッサージ(スキンシップ)をしている時の、互いに見つめ合っているところけそうな親子の表情。
- 母親の受け止めや悩みの引き出し方、母親同士のつなぎ方。
- 困っていることや悩みについて答えを出さないかわり。
- 我が子と出会う確率。
- 命の誕生。
- 一対一で関わる時間の必要性。
- 子育てに手遅れはない。

3) 助産師が行った子育て支援で貴園が参考にしたい内容

- 母子相互作用。

- ・命の大切さ。
 - ・親子の触れ合い。
 - ・母子の視点もふまえた親子の捉え。
- 4) 貴園が実施している子育て支援で効果的内容
- ・園庭開放を通した母親同士の交流の場・保護者の絵本の読み聞かせ。
 - ・親子で朝食，お弁当作り，親子で体を動かして遊ぶ。(外部講師)

5 研究成果及び今後の課題

(1) 研究成果

- ・子育て支援アドバイザーの協力による「子育て・子育て支援事業」により，母親が子育てに関して意識していたこと（目を見て話すこと・肌が触れ合うこと・語りかけ）など，一般的な知識を行動化ができるようになることが本研究を通じて明らかになった。
- ・妊娠から出産まで母子を支援している助産師と，日々の保育から子どもを通して保護者を支援する保育者が，支援の場を共有することにより，保育者は子育て支援アドバイザーから，命の始まりや乳幼児期の身体の発達，スキンシップの必要性などを学ぶことができた。子育て支援アドバイザーは保育者が一人一人の子どもをよく見て，より子どもの育ちや特徴をよく知っていることなどに気付くことができた。
- ・医療（母子保健）と教育の互いのよさが明らかになり，専門性の異なる者が連携することで，お互いの良さを生かす支援が可能になり，支援が充実して良好な親子関係の構築につながっていくと考える。

(2) 今後の課題

- ・子育て支援アドバイザーの1回の保護者支援では，子どもの育ちに必要とされるかわりをしっかり理解し，十分に定着させることが難しいと思われる。
- ・今後は，子育て支援アドバイザーが実施するアタッチメントを生かした子育て支援や，乳幼児期の育ちがわかる講話など継続した取組が必要であり，幼稚園や保育所では，保育者が継続して取組んでいくための工夫が必要であると考えられる。